

# 『黒を一杯』— フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア州における体験より — “Un nero!” — *piccola osservazione culturale sulla regione Friuli - Venezia Giulia*

山本真司

Shinji YAMAMOTO

0. はじめに イタリアの2つの町、ウディネとトリエステに関する逸話を取り上げ、それぞれの町において使われている「黒」という色に関するある表現の、歴史的・文化的背景に注目した考察を行ないたい。出発点となるのは、筆者自身が現地での滞在中に個人的に見聞きした話・事実であるが、それをより広い文化的文脈に位置づけたいと思っている。この地域の事情の紹介あるいは再確認のための一助とできれば幸いである。

1. 場所 今回の考察の対象となるのは、イタリア北部の最東端の州、フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア自治州<sup>1)</sup> *Regione autonoma Friuli - Venezia Giulia* である。このように複合的な名称を持っているのは、この州が、フリウリ地方と、第一次世界大戦後にイタリア領になった州東部、ヴェネツィア・ジュリア地方の、2つの部分からなっていることによる。そして、その中心となる町が、それぞれ、ウディネ、トリエステ、である。

フリウリ地方は、ウディネ *Udine* 県、ポルデノーネ *Pordenone* 県、およびゴリツィア *Gorizia* 県の3つの県 *provincia* (県庁所在地の名前もそれぞれ同名) から成る<sup>2)</sup> と考えられている。フリウリという名前は、中世においてこの地方の中心地であった都市 フォルム＝ユーリー *Forum Juli* (現在のチヴィダーレ *Cividale*) の名前に由来する。

それに対して、「ヴェネツィア・ジュリア<sup>3)</sup>」という名称は、もともと、歴史的慣用の裏づけのあるものではなく、ゴリツィア出身の言語学者アスコリ *G. I. Ascoli* の考案したものである。1863年、狭義のヴェネト地方とほぼ同一である「本来の・狭義のヴェネツィア」 *Venezia propria* と並べて、当時まだイタリア王国に合併されていなかった、トレント地方 (あるいはヴェルシュ・ティロル *Welsch-Tyrol*) を「ヴェネツィア・トリデンティーナ」 *Venezia tridentina*、そして「オーストリア＝ハンガリー帝国沿海州」 *Litorale austro-ungarico* を、この地方の境目をなすジュリア・アルプス *Alpi Giulie* にちなんで、「ヴェネツィア・ジュリア」と呼んだことに由来する<sup>4)</sup>。

ちなみに、「ヴェネツィア・ジュリア」の「ジュリア」は、幾つかの記述に見られるように、先に述べた「フォルム・ユーリー」の「ユーリー」 *Juli* 「ユリウス (・カエサル) の」と語源的に関連してはいるが、アスコリ自身は、命名にあたって、むしろこの地方の境目をなす「ジュリア・アルプス」 *Alpi Giulie* (ゴリツィア地方を代表する河川であるイゾンツォ川 *Isonzo* の中・上流域にある山脈) のことを念頭に置いていたように思われる。

第一次世界大戦後、沿海州地方がイタリア王国に併合されると、アスコリの発案は政治的現実となる。その後、第二次世界大戦後の国境線変更によって、イストリアのほぼ全域およびゴリツィア県のかなりの部分がユーゴスラヴィア領（後にスロヴェニア領・クロアチア領）となった。ゴリツィア県のうちイタリア領に残ったわずかな部分は、大雑把に言えば、文化的にはむしろフリウリ文化の色彩が強いと思われるのでフリウリに含める<sup>9)</sup>とすると、イタリアにおけるヴェネツィア＝ジュリアは、実質上、トリエステ市とその周辺の少数の市町村からなるトリエステ県のみにも縮小されて現在に至っている。<sup>9)</sup>

2. 言語的・文化的相違 ウディネ県を中心としたフリウリとトリエステ県を中心としたヴェネツィア・ジュリアは、さほど大きくもない同一の州に属している区分に過ぎないので、部外者からは、ややもすると一緒くたにされがちである<sup>7)</sup>。しかし、少なくとも現在は、フリウリとトリエステは、住民の意識の上ではかなり明確に区別されており、以上のような政治的所属の歴史はもちろん、文化的・社会的にも少なからぬ相違が見られる。言語に関して言えば、何よりもまず、トリエステではイタリア北東部の大部分と同じくヴェネト方言<sup>8)</sup>が使われている<sup>9)</sup>のに対して、フリウリにはフリウリ語という独自の言語が存在する<sup>10)</sup>点が異なる。しかし、本稿では、それとは、違った角度から、フリウリとトリエステの言語・文化の相違について考えてみたい。

3. 「黒を一杯」 フリウリとトリエステの間の違いは、さまざまなエピソードやアネクドートとしてさかんに取り上げられるが、その一つに、飲食店と「黒」にまつわるものがある<sup>11)</sup>。それは、ウディネ（一例としてウディネの町を引き合いに出すが、フリウリの他の町で同じようなことが起こって不思議ではない）に行ったトリエステ人が、喫茶店<sup>12)</sup>で「黒を一人前 un nero と注文する<sup>13)</sup>と、予想していたものとは全く異なるものが出てきて戸惑う、という話である。

実は、同様の状況で、フリウリ語で「黒」neri という、「黒ワイン（すなわち赤ワイン）を一杯」のことである。その影響で、フリウリでは、イタリア語の会話でもしばしば「黒」がワインの意味に取られてしまうことが起きる。

それに対して、トリエステでは、nero はコーヒーのことに言及した表現である。クリームもミルクも何も入っていない、ただ単にコーヒーの抽出液だけのものをこう呼ぶようである（ただし、砂糖を入れることはある）。つまり、われらがトリエステ人は、お気の毒に、コーヒーのつもりで、ワインを注文してしまったわけである。<sup>14)</sup>

実は、イタリア全土で普通に通じる標準的なイタリア語表現では、ワインのことを言うにもコーヒーについていうにも、nero と呼ぶことは普通ではないようである。色の濃いワインのことは、「赤ワイン」vino rosso とする（あるいは、vino nero という、vino nero d'Avola のように、ある特定の銘柄のぶどう酒を思い浮かべるようである）。また、クリームもミルクも入っていない、純粹に抽出液だけのコーヒーを注文する時には、ただ単に「コーヒーを一杯」un caffè とするのが普通であろう。

なお、これに限らず、トリエステでは、コーヒーのレパトリーおよびその名称についても、イタリア標

準とは異なっていることが知られている<sup>15)</sup>。

このように、フリウリにせよトリエステにせよ、たまたまこのように標準的なイタリア語では通例ではない表現が用いられ、しかもそれが2つの場所で異なった意味を担っているということが、混乱の原因となったわけだが、この二つの場所でこのような言葉遣いの違いが生まれたのには、十分な歴史的・社会的背景があるように思われる。それを理解するために、この地域の歴史を振り返って見たい。

**4. フリウリの成立の歴史** フリウリは、中世から現代に至るまで、基本的には、典型的な農村型（あるいは農村依存型）の社会としての特徴を保ってきた。

11世紀には、アクイレアアの総司教 *patriarca*<sup>16)</sup> が王権 *regalia*<sup>17)</sup> を付与された司教伯となり、フリウリは神聖ローマ帝国内の言わば自治国家「フリウリ国」*Patria del Friuli* となる。この時代に、総司教の職に皇帝の近親者が多く送り込まれ、その政策のイタリアにおける重要な拠点となる。

そのため、この時期、北部・中部イタリアの他の地方が、ルネッサンスを迎え、帝国の権力の圏内から政治的・経済的に離脱して行くのに対して、フリウリは、逆にドイツとの結びつきを強め、イタリアとは切り離されて中世末期を過ごす。

さらに、ルネッサンス時代のイタリアが都市と商業経済の発展を経験するのに対して、そのような動きとは切り離されたフリウリは、中世以来の封建制度が保たれ（あるいはかえって強化され）、人口の大多数を占める農民を封建貴族が支配・搾取する、典型的な農村社会としての姿を保ったまま近代の入り口に至るのである。

そのような社会の、従属階級 *classe subalterna*<sup>18)</sup> としての農民たちの文化を証言する産物が、実はフリウリ語である。事実、フランチェスカート G. Francescato、サリンベニ F. Salimbeni、ペッレグリーニ G. B. Pellegrini などの研究者の明らかにしたところによると、フリウリ語の形成の過程は、上述のようなフリウリの社会状況と、密接に関連している。

この時代に、パダナ平野地域が、トスカーナから上昇してきた言語革新の波（これは、フィレンツェなどをはじめとするトスカーナ諸都市の経済的・政治的繁栄とその影響、とくに商人たちの活動による）を蒙って、現代の北イタリア諸方言が形成されていったのに対し、フリウリは、このような社会的な孤立のゆえに、北イタリアとは同じ言語変化を蒙るには至らず、独自の進化を遂げるに至ったのである。いわゆるレトロ＝ロマンスの特徴の定着も<sup>19)</sup> そのような独自の変化の中に含まれる。

1420年、隣国の動きに常に脅威を感じていたヴェネツィアは、フリウリの内紛に乗じてこれを征服し、属国とする。これは、また、ヴェネツィアが、共和国の西側でも周辺諸都市を支配下に入れ、海洋国家から大陸部の所領経営に大きく依存する体制へと移行していく動きと呼応する。ヴェネツィアは、フリウリの社会に大きくてこ入れすることをせず、従来の社会制度をかなりの程度温存した上で、もっぱら経済的収奪の対象として扱った。それゆえ、フリウリの貧しい農村地域としての性格は基本的には変わらなかった。このような状況は、ヴェネツィア共和国の終焉を迎えた後、ナポレオン体制の時代、また、その後のロンバル

ド＝ヴェネト王国においても続く。

また、フリウリの経済的発展を阻害した要因として、イタリアからヨーロッパ北部への通路という戦略的に重要な地点に位置しているゆえに（また、イタリアへの併合後には、北部国境地域という位置づけゆえに）、常に戦争の脅威に晒され、またその被害を蒙り続けてきた、ということ念頭に置いておく必要がある。

5. フリウリとコーヒーとワイン さて、フリウリにおいては、コーヒーを飲むのは、かつては一部の社会的に裕福な階層のみの習慣であった。貧しい農民にとっては、普通のコーヒーが高くてなかなか手に入らないものであった。タンポポや焦がし麦などの代用コーヒーの発達は、そのような時代の名残とも言える。また、「（コーヒー用の）スプーン」という用語がフリウリ語 *sedon* < ゲルマン語 *SKAITHO* ではなくてヴェネト（ヴェネツィア）方言起源の *cucjarin* < *COCHLEARIU* が使われるのも、上層言語であるヴェネツィア方言の話し手である都市の階層から広まったからであろう<sup>20</sup>。

それに対して、ワインは、農村地域でも多く用いられた飲み物であり、フリウリ語の担い手である社会階級にとっても身近なものであった（ちなみに、フリウリでは人口に比してアルコールの消費量が多く、アルコールの濫用やそれへの依存症は、古くから社会問題となってきた）。したがって、黒い飲み物の典型というイメージが、コーヒーよりも、より親しみ深いワインに関連付けられて使用されてきたのは、ごく自然なことと言えよう。

6. トリエステの状況 トリエステは、周知のごとく、アドリア海沿岸の海に面した都市で、周囲には耕作に適した土地が面積的に少ないことから、またカルスト台地の地質そのものが農業にあまり適していないことから、海での活動や海上交通による商業に依存して生きることを運命づけられていた。

ポー川河口部からイストリア半島に至るアドリア海北岸地域には、古くから漁師の行き来があり（例えば、つい最近の 20 世紀半ばまで、イストリア半島 *Istria* の人々が船を仕立ててヴェネツィア側の漁港キオツジャ *Chioggia* までやって来るのは普通であったし、伝統的に、キオツジャの漁師たちはイゾンツォ川の流域まで漁に出かけていたのであった）、この一帯は、ひとつの言語・文化圏をなしていた。トリエステもそのような文化圏の成員の 1 つとして発達してきたものと考えてよいであろう。そして、周知のように、後に、この地帯からヴェネツィア共和国が頭角を現してくるのである。

政治的・行政的に言うと、このアドリア海沿岸地域も、中世の間しばらくは州都（また後には府司教座）であったアクイレリアの影響下にあったと考えられる。それが、別の文化圏を構成するようになったきっかけの一つは、おそらく、6 世紀に起こった三章問題のシスマによる府司教座の分裂である。アクイレリアの府司教は、いわゆる三章弾劾に同意したローマ教皇に対抗してシスマを起こしたが、後に、同司教座は、ローマとの合同を推進する司教とそれに反対する司教とに分裂した。コルモンズ *Comons* に司教座を移した反ローマ派が内陸部を管轄したのに対して、グラード島を拠点とした合同派は、アドリア海沿岸部を管轄した。この分裂状態は、ローマとの全面的和解が成立した後も恒常化し<sup>21</sup>、内陸部のフリウリ語圏、沿

岸部のヴェネト方言圏という、言語圏の区別へとつながっていく。

トリエステが、フリウリとは(そしてまたヴェネツィアとも)決定的に違った道を歩み始めるのは、14世紀後半ごろからであろう。歴史の公式記録によれば、トリエステは、この頃(1382年)にオーストリアに臣下の礼を取ったことになっている。一説には、ヴェネツィアの政治的・軍事的影響力に脅威を感じて、庇護を求めてのことだったと言うが、事情はそれほど単純ではなかったらしい。トリエステ内部でも、親ヴェネツィア派と親ハプスブルク派の抗争があったことも知られている。両大国の間の覇権争いに巻き込まれて翻弄され、ある時はヴェネツィアの、ある時はオーストリアの支配下に置かれながら、最終的には、後者との結びつきが決定的になっていったということであろう。

1711年、トリエステは、自由港として指定され、その後、首都ウィーンとつなぐ鉄道も開通する。こうして、帝国の玄関をなす港としてまた帝国の大都市の一つとして発展を遂げるに至ったのである<sup>22)</sup>。そして第一次世界大戦後の戦後処理によってイタリアに併合されるまで、オーストリアの支配下にとどまるのである。

農村的なフリウリとは異なった、都市の文化が発展したこと、そして、オーストリアの支配下にとどまり、その文化の影響を強く受けたこと、などによって、トリエステは、フリウリとは異なった文化を発展させるに至った。コーヒーについての独特の発展も、このような文化背景を念頭において理解するべきものであろう。あるいは、少なくとも、「黒い飲み物」が端的にコーヒー(の一種)を意味し得るに至るほどに非常に身近な飲み物として定着したというのは、都市ならでのことであった(逆に言えば、そのような事は、かつてのフリウリのような貧しい農村社会ではあり得なかった)ということは確かであろう。

また、本稿では詳細に取り上げる余裕がないが、トリエステのコーヒーの名称とオーストリアのそれとの間で比較・対照研究を試みることによって、何か有益な示唆を得られるかも知れない<sup>23)</sup>。例えば、トリエステ風の *nero* とオーストリア風の *Schwarzer* は歴史的・起源的に関連があるのかあるいは別々に発案された名称なのか、トリエステ風の *cappuccino* とドイツ語で言う *Kapuziner* の間の類似点と相違点<sup>24)</sup> はどう理解するべきか、などの疑問は、興味深い問題提起となりそうである。<sup>25)</sup>

7. 最後に イタリア語にせよ地方語にせよ、ある言語において、ワインなりコーヒーなりがある特定の色の表現と結びつくということ自体は、別に珍しいことではないであろう。ワインが赤いと言われるか黒いと言われるかも、それ自体としては重要な相違をきたす問題のようには見えないかも知れない。

しかし、ウディネとトリエステの間にあるこの小さな表現の相違が、それぞれの町が辿った歴史的・社会的経緯の違いを反映しているということは、十分に興味深いことであろう。注意深い観察眼を持つてすれば、日常卑近のささいな現象にも、より広範囲な考察への糸口が見つかるということを示す好例ではなからうか。

少し小さな地図ならばほとんど区別がつかなくなりそうな距離にある2つの町であるが、その間にこれだけの社会的・歴史的違いがあり、それが小さな言語表現にも反映されているという事実は、一見ささいな

相違にしか見えない事柄を軽視したくなる衝動に対する戒めともなろう。「フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア」と十把一絡げにできないゆえんである。

また、イタリア語の世界では、ウディネとトリエステの場合のように、小さな距離の隔たりが興味深い言語的違いを意味するような事例が、さまざまな場所で見出されても不思議ではないように思われる。いわゆる標準語の知識だけでは本当に言語の姿を知ったことにはならないこと、また、どんな言語の知識も、今まで知り得た限りでの言語の姿に過ぎないことは、とりわけイタリア語の研究の場合には、強調してもし過ぎることはないであろう。

## 注

本稿で考察の対象とするのは複数言語併用地域なので、多くの地名も、それに応じて複数の形（イタリア語名、フリウリ語名、スロヴェニア語名、etc.）が存在する。標準語形のみならず方言的ヴァリエーションまでを考慮すると状況はさらに複雑になる。しかし、本稿では簡略化のため、どの地名も原則としてイタリア語形で統一した。

1) 語の構成をより明確に示すために、「=」あるいは「・」だけよりも、両者をともに使用する。ただし、どのように使用すればよいかについては、筆者にも戸惑いがあるが、本稿では、「フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア」で統一した。

2) 実は、ポルデノーネ県がウディネ県より分離独立したのは第二次世界大戦後のことなので、伝統的には、フリウリはウディネとゴリツィアという2つの地区からなっていると言えることになる。

3) 「ヴェネツィア」という名前は、今日ではヴェネツィアの町のことを指すのが普通だが、「ヴェネツィア・ジュリア」というときの「ヴェネツィア」は、ヴェネト人 *veneti* の住む地という意味である。ヴェネト人とは、もとはローマ時代以前からこの地域に住んでいた先住民族の名前であり、ローマ時代にはこの地域に制定された帝国第十州はこれにちなんで *Venetia et Histria* の名称を受けた。その後、「ヴェネト」の概念は、中世以降成立したヴェネト方言の言語・文化圏（その広がり・確立に大きく貢献したのは、言うまでもなく、ヴェネツィア共和国の支配である）に受け継がれて現在に至る。

4) ヴェネツィア・ジュリアについての記述に関しては、アスコリが1863年に書いた論説が、Ellero 1987, pp. 226, 227 に引用・再録されているので、本稿の執筆の際にはこれを参照した。

5) 実は、ゴリツィアをどのように位置づけるかは微妙な問題である。既に述べたように、現在、当事者の意識の中では、フリウリとヴェネツィア・ジュリアとは、かなり明確に区別されるべき存在として意識されている。これは、ヴェネツィア・ジュリアをほぼトリエステ地区と同一視しているからであるが、ヴェネツィア・ジュリアという概念が考え出された時点では、ゴリツィア地方 — その大部分がまだイタリア王国の国境外にあった — は、その中に含まれていた。現在の国境に基づいて話すと、イタリア側のゴリツィア地方は、言語的・文化的な観点からも、フリウリの一部とみなされている。事実、ゴリツィアはある意味で現代

フリウリ語文学の発祥の地であり、フリウリ文献学会の設立の地でもあるなど、フリウリ文化にとって重要な役割を果たしてきた。それに対して、国境の向こうのゴリツィア東部は、基本的にスロヴェニア語圏であり、西部とは言語的にも文化的にも異なっている（なお、ゴリツィアの町自体は複数の言語が行われる地域で、そこでは、フリウリ語は、一種のリングア・フランカとしても通用していた）。

6) 本来ならば、沿海州＝ヴェネツィア・ジュリアの歴史は、数の上からはイタリア人を上回るスラヴ系（スロヴェニア系・クロアチア系）やそれ以外のマイノリティのことを考慮に入れることなくしては完結しないが、それは本稿の論筋からは大きく離れてしまうことである。今回は、基本的に、言わばイタリア側からの歴史の見方という制約の枠内で、話を進めるにとどめることをお断りしておく。

7) それに輪をかけて混乱を大きくしたのが、ヴェネツィア・ジュリアの概念の拡大解釈の傾向である。第一次世界大戦後から今日に至るまで、フリウリを、歴史的に由緒のあるその名前を犠牲にしてまでも、ヴェネツィア・ジュリアに含めようとする動きがあったのである。ヴェネツィア三州 *Tre Venezie* あるいは *Regioni trivenete* という名称の中にフリウリをも含めるのは普通であったし、フリウリの物事に「ヴェネト」の形容詞を冠することもたびたびあった。例えば、*Messaggero Veneto*（ウディネに本社を持つ新聞）や *Fiume Veneto*（実際にはポルデノーネ県にある）など。

8) ただし、トリエステ方言 *triestino* は、他のヴェネト諸方言とは異なる諸特徴を持っており（例えば、強勢母音音素が5つしか存在しない、また、疑問文などのシンタクスが簡略化されている、など）、その形成にはクレオール的なメカニズムがあると推定されている。

9) もちろん、ヴェネト方言のみが使われているということではなくて、共和国の共通語であるイタリア語、およびさまざまなマイノリティの諸言語（その中で最も話者が多いのはスロヴェニア語）も存在していることは言うまでもない。

10) もちろん、正確に言うと、フリウリ語はフリウリの特有の言語の1つだがフリウリ全体がフリウリ語を話しているわけではない。フリウリ語話者のほかにも、彼らとは区別される独自の言語的アイデンティティを持つ言語集団（これを、民族、マイノリティ、など、どういう名称で呼ぶかの問題は別にして）がいくつも存在している。重要なものとして、スロヴェニア系の住民、また数はさらに少ないがドイツ語系の人々などが挙げられる。また、アドリア海沿岸地域のグラード島の方言 *gradese* やマラーノの方言 *maranese* またイゾンツォ川下流域方言 *bisiacco* なども、通常は（ヴェネト方言の一種として）「イタリア系方言」の中に含まれ、その話し手も普通の「イタリア人」と見なされてしまっているが、フリウリの中で発達してきた特有の言語である。なお、フリウリ語には、地理的・政治的な意味でのフリウリを意味する *Friül* とする語のほか、フリウリ語が行われる地という意味での *Furlanie* という語があり、フリウリの中でも伝統的にフリウリ語以外の言語が行なわれる地域は *Furlanie* には含まれない。

11) 筆者が現地滞在中に複数の人から聞いた話である。また、インターネット上にも1つならず同じ話に触れているサイトが存在していることから、ある程度よく知られている話と考えてよいであろう。

12) といふかむしろイタリア式の *bar* とか *osteria* といったほうが良いであろう。なお、フリウリ語では本来伝統的な飲食店のことを *ostarie* (イタリア語の *osteria* に相当) と呼んでいたが、今では *bâr* ということが多いようである。

13) 自分の出身地とは異なった町へ行つたということなので、この話者はイタリア語 (厳密に言えばその地方的変種) で喋つたと考えるのが自然である。しかし、ヴェネト方言で話したという可能性も全くは否定できないが、もしそうだとすると、話の成り行きに大きな違いは起きないと考えてよい。

14) また、容易に予想がつくように、これとは逆のエピソード、すなわち、フリウリ人がトリエステでワインを頼むつもりで「黒を一杯」と言うところからコーヒが出てきてしまった、という話も存在する。

15) いくつか例をあげると、普通の「カプッチーノ」*cappuccino* はトリエステでは「カフェラッテ」*caffelatte* と呼ばれ、トリエステでカプッチーノと言うと、普通の「マッキアート」*macchiato* に相当する。トリエステでマッキアートと言うと、普通のマッキアートよりも混ぜるミルクの量が少ないものを言うが、ミルクを一滴だけ入れたものは、別に、「ゴッチャート」*gocciato* と呼ばれる (以上、[http://www.culturalia.info/index.php?option=com\\_content&task=view&id=37&Itemid=51](http://www.culturalia.info/index.php?option=com_content&task=view&id=37&Itemid=51) による)。

16) 総大司教、総主教、などとも訳される。キリスト教の用語は、日本語では、教派ごとに、また、文脈によって、異なった訳語が当てられることが多いが、ここではその詳細を尽くすことはできない。

17) 王権という言葉は紛らわしいが、これによって、アクイレイアの総司教が王になったり、フリウリが王国になったわけではない。本来、王にのみ許された諸特権であったが、1356年の金印勅書によって選帝諸侯に付与されるなど、必ずしも王のステータスとは結びつかなくなつていったことはよく知られている。

18) 共産主義思想家グラムシ A. Gramsci の用語で、歴史家ギンツブルク C. Ginzburg によってフリウリの民衆文化の分析に適用された。ギンツブルクは、グラムシになつてこの用語と概念を用いることを宣言している (「チーズとうじ虫」一章の注) が、わが国においてはギンツブルクの日本語訳にもかかわらず「従属階級」という訳語はあまり広まらず、後にスピヴァーク G. Spivak の研究が知られるようになるとともに、英語読みの「サバルタン」が定着しつつある。

19) レト＝ロマンス的特徴の一つである CA- > kja の変化が、この時期にフリウリ語に定着したことが確かめられている (ロマンス系言語からスロヴェニア語などのスラヴ系言語へ借用された語彙の研究による)。ただ、正確に言えば、レト＝ロマンス的特徴のいくつかは保守的な特徴 (ラテン語におけるある音や形態が保存された) なので、その場合は進化すると言うよりは変化しなかつたと言うべきであろうか。

20) 拙稿「レト・ロマンス語の概念の再検討—フリウリ語の *sedon / cucjarin* のケースを例に」『ロマンス語研究』vol.28 (1995) pp. 71-76 を参照のこと。

21) ローマとの再合同の条件として、両方の司教を公認し、どちらにも総司教の称号が認められた。なお、コルモンスの司教座は、チヴィダーレ、ウディネと場所を移りつつ存続したが、18世紀に廃止された。グラードの司教座は後にヴェネツィア・リアルトへと移動しヴェネツィアの総司教座となった。

- 22) オーストリアが港湾都市の経営に本格的に取り組み始めたのは意外と遅く、トリエステ (およびフィウメ) が自由都市に指定されたこの時代以降である。ヴェネツィアの力が弱まり、妨げとなくなるまでは、本格的な取り組みは困難であったということらしい。あるいは、それまで、帝国政府は、トリエステの港湾都市としての価値を十分に認識・利用していなかったとも言えよう。
- 23) オーストリア風のコーヒーをイタリア風のコーヒーと比較した解説・研究は少なからず存在するが、トリエステのコーヒーと比べたものはあまり見当たらないようである。
- 24) トリエステの *cappuccino* とオーストリア風の *Kapuziner* は、何も入れない普通のコーヒーに、少量だけ泡 (*cappuccino* の場合は泡立てたミルク, *Kapuziner* の場合は泡立てたクリーム) を落とすところが共通している。それに対して、イタリアで普通に言うところの *cappuccino* は、周知のごとく、ミルクを入れたコーヒーに、泡立てたミルクをたっぷり載せたものである。
- 25) トリエステは、スロヴェニア語圏でもあるが、スロヴェニア文化圏のコーヒーについても語るためには、さらに、バルカン方面からの影響 (トルコ風コーヒーの分布) なども考慮に入れなければならない。

#### 参考文献

- DE SZOMBATHELY, Gabrio, *Un itinerario di 2000 anni nella storia di Trieste*, Trieste, Edizioni "Itali Svevo", 1994-1996.
- ELLERO, Gianfranco, *Storia dei friulani*, Udine, Arti Grafiche Friulane, 1987.
- FAGGIN, Giorgio, *Vocabolario della lingua friulana*, Udine, Del Bianco editore, 1985.
- FRANCESCATO, Giuseppe, / SALIMBENI, Fulvio, *Storia, lingua e società in Friuli*, 2a ed., Udine, Casamassima, 1977.
- FRAU, Giovanni, *Friuli*, Pisa, Pacini editore, 1984.
- FRAU, Giovanni, *La lenghe furlane*. Edizione aggiornata di "*Individualità linguistica del friulano*", Udine, Clape clutural Aquilee, 1975.
- LINARDI, Maria / MALTONI, Enrico / TERZI, Manuel, *Il libro completo del caffè*, Novara, De Agostini, 2005.
- LOSERI RUARO, Laura, *Atmosfera di Trieste*, Trieste, Gruppo Stampa Editoriale Sergio Schiberna editore, 1998.
- MANIACCO, Tito, *Storia del Friuli*, Roma, Newton Compton editori, 1985.
- MANIACCO, Tito / MONTANARI, Ferruccio, *I senzastoria*. Parte prima: *Friuli dalle origini al 1866* (edizione novembre 1977), Parte seconda: *Friuli dal 1866 al 25 aprile 1945* (edizione novembre 1978), Parte terza: *Friuli dal 25 aprile 1945 al 1964* (edizione maggio 1980), Udine, Casamassima.
- MENIS, Gian Carlo, *Storia del Friuli: dalle origini alla caduta dello stato patriarcale (1420)*, 3a ed. con un'appendice: "Dalla fine del Medioevo a oggi", Udine, Società filologica friulana, 1976.
- PASCHINI, Pio, *Storia del Friuli*, 3a ed., Udine, Arti grafiche friulane, 1975.

PIRONA, Giulio Andrea / CARLETTI, Ercole / CORGNALI, Giovanni Battista, *Nuovo Pirona. Vocabolario Friulana*. 2a edizione, aggiunte e correzioni riordinate da Giovanni Frau, Udine, SFF, 1992.

SKUBIC, Mitja, *Romanske jezikovne prvine na zahodni slovenski jezikovni meji*, Ljubljana, Znanstveni inštitut Filozofske fakultete, 1997.

ZAMBONI, Alberto, *Il Veneto*, Pisa, Pacini editore, 1974.

*Enciclopedia monografica del Friuli Venezia Giulia*, vol 2. *vita e economia* (parte prima & parte seconda), vol 3. *la storia e la cultura* (parte prima, parte seconda, parte terza), Udine, Istituto per l'Enciclopedia del Friuli-Venezia Giulia, 1971-1983.

*Il Friuli Venezia Giulia. Paese per paese*, (in 4 voll.), Istituto per l'Enciclopedia del Friuli-Venezia Giulia, Firenze, Bonechi editore, 1985.

*Friûl di soreli jevât: setante ains di storie, di culture, di Filologjche (1919-1989) : 66n Congres, Gurizze, 26 di novembar 1989* / a cura di Eraldo Sgubin e Manlio Michelutti, Udine, Società filologica friulana, 1989.

*Marian e i país dal Friûl orientâl: 63n Congres, 28 di setembar 1986*, a cura di Eraldo Sgubin, Udine, Societât filologjche furlane, 1986.

参照した Web サイト (URL は 2007 年 9 月末現在のもの)

<http://de.wikipedia.org/wiki/Cappuccino>

<http://fc.retecivica.milano.it/Rete%20Civica%20di%20Milano/Pensieri%20e%20Parole/C'era%20una%20volta/trasporti/S028E1954?WasRead=1>

[http://it.wikipedia.org/wiki/Cappuccino\\_\(bevanda\)](http://it.wikipedia.org/wiki/Cappuccino_(bevanda))

<http://trieste.linux.it/node/44>

[http://www.culturalia.info/index.php?option=com\\_content&task=view&id=37&Itemid=51](http://www.culturalia.info/index.php?option=com_content&task=view&id=37&Itemid=51)

<http://www.piandelgrisa.it/sapeviche.php>

地図 現在のフリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア



① ポルデノーネ県

② ウディネ県

③ ゴリツィア県

④ トリエステ県

フリウリ＝①＋②＋③

ヴェネツィア・ジュリア＝④